

1995年、阪神淡路大震災が起こった直後の2月に、愛知県美術館ではアンドリュー・ワイエス展を開催した。震災の影響は少なからずあって、アメリカから借りる約束だった作品が届かなかったり、関西で借りる予定の作品を借りに行けなかったりと随分と苦労した。1月17日が来るたびにそのときのことを震災と共に思い出すのだが、今年の1月17日は私にとっては大変な激震の日となった。アンドリュー・ワイエスが前日の夕方に亡くなったのだ。しばらく前から体調が崩していると聞いてはいたが、17日の未明にワイエスのコレクション・マネージャーからのメールでその訃報を知らされた私は、朝になるとあちこちからの電話やメールでのやり取り、美術館に出勤しての対応など、慌ただしい一日を送った。

展覧会の準備で会った1993年の秋以来15年の間に数年に一度の割合で本人と会ってきたが、温和で飾らぬ人柄は変わることはなかった。一般にアンドリュー・ワイエスは人嫌いで、会うことも難しく、とつきにくい人物との風評があるが、それは周りの人のガードが固いからである。実際に会ってみると、気さくでいやな印象はまったくない。始めて会った時も「何でも聞きたいことを聞いてくれ」と、こちらの緊張を和らげてくれたの思い出す。夏を過ごすアメリカ北東部のメイン州にあるワイエス家所有の島に彼を訪ねたときは、ちょうど腰の手術をしてそれほど経っていなかったこともあって、彼の手を引いて家庭菜園のある家の近くを散歩した。彼の手は暖かだった。3年前にはそれまでの交流の結果、予期しなかったことに愛知県美術館に作品を一点寄贈いただくという幸運も得た。

1917年に有名な挿絵画家の息子として生まれたワイエスは、病弱なこともあって学校教育は受けず10代に入るとアカデミックな絵の手ほどきを父親から受けた。しかし、幼い時から見よう見まねで描き始め早くからその才能を見せていたという。父からのある種の英才教育もあって、二十歳を迎える頃にはテクニックの優れた将来有望な水彩画家として知られるようになっていた。しかし、彼を真に厳しく真剣で、時に思索的なワイエスとして成長させたのは、少年時代からひとり近隣を歩き回る中で自分自身を見つめてきたことや、踏切事故での父親の突然の死、自分自身の生死をさまようような片肺を切除した大手術の経験であった。彼自身の言葉に「私はこの世のはかなさというものに人一倍敏感である。すべては移り変わる。父の死がそう教えてくれた」とあるように、日本の『方丈記』の無常観にも通じるような観念を会得していた。そのような感覚が我々日本人にも好かれる理由かもしれない。

しかし、彼自身は日本的なものに興味を持っていたわけではない。アメリカで国民的画家と評されるのは、17世紀にニューイングランド地方に植民してきた清教徒たちが持っていた質素で堅実な生活を尊ぶ感覚に響く作品を描いてきたからだろう。にわかには信じがたいが、それは消費社会や繁栄を謳歌するようになってからもアメリカ人の多くが建国以来底流として持ち続けているものである。彼の描いてきた対象は、生まれ故郷のペンシルヴェニア、チャッツ・フォードという自然豊かな田舎町と、夏の家のあるメイン州クッシング近辺のみであった。それは彼にとって見慣れた風景であり、見知った人々であったが、そこに見ていたものは、自分を育ててくれた真理を内包した景色であり、敬意に値する人生の重みや存在感を感じさせる人々だった。彼を有名にした作品《クリスティーナの世界》のモデルとなったメイン州の人物と家を30年間にわたって描き続けたり、生家近くの農場に至っては10代から描き始め、主人が亡くなった以後も含め70年間にわたって描き続けたりしている。あるいはセンセーショナルな報道をされたヘルガという女性モデルも、15年間にわたって描き続けた。風光明媚な景色を求めて旅するようなタイプの画家とは異なり、深く知った対象でないと描けなかったといってもいいだろう。だからこそ我々に残された作品からは、一瞬の光景を切り取った画面ではなく、ある時間の幅が凝縮されたような深みを感じることができる。

ワイエスの評価については、アメリカでも議論の分かれるところであった。モダニズムを信奉する評論家の中には彼を単に「うまいイラストレーター」だと切って捨てる者もいたのは事実で、元メトロポリタン美術館長のトマス・ホーヴィングも述べているように、ワイエスは誤解されやすい部分があり複雑な画家である。それは、挿絵画家であった父親の影響なのか、時に物語臭さの強い絵作りをした作品を残していることと、なにより写真や図版のような印刷物になったときに、実作品が持っている質感や強さが失われやすいことにある。実作品をつぶさに目にする機会があれば印象はかなり違ったものになるだろう。印刷物になったときには、「写真のようにただ再現描写するだけの画家」と解釈されかねない危うさもあり、以前写真を基にしたスーパーリアリズムが流行したときには、その一派に括られたこともあったのである。

1974年以來、これまで日本でも何度も展覧会が開かれてきており、日本人の好きな画家の一人といってもいいだろう。ワイエス自身が内容に関与した展覧会は、折しも現在愛知県美術館を巡回中のものが

最後となってしまった。何かの因縁を感じずにはいられないが、この展覧会はこれまでと違い、彼が手の内を見せるかのように、これまで公開せずに保管してきた素描や水彩を完成作とともに展示することを了解したものである。そこに見られるのは、畏まってスーツに身を包み、周りの人にガードされたワイエスでなく、気さくに打ち解けた自分を見せてくれるワイエスである。彼は91歳になって自分をさらけ出すことの抵抗感を乗り越えられたのかもしれない。作品からは彼の息遣いや視線を生々しく思い起こさせてくれ、訃報のニュースとともに記憶に残るだろう。

(ST)